

落陽

行政

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

冒険者ギルド in フランス革命（つぼい市民革命）

”冒険者ギルド”という組織について、考察・妄想を膨らませた結果できたナニカです。この世界観で連載を書くかもしれないし、書かないかもしれません。

第1話

目次

1

第1話

午後2時過ぎ、エマニユエルは窓コントワール口に片肘をついて、物思いに耽っていた。

物思いといっても高尚なもの、例えば「人間は何のために生きるのか？」などでは全然なく、ただの懐古だ。

つまり、現実逃避である。

十年ほど前、エマニユエルが王都の冒険者ギルドコンパニオナージュに事務方として雇われたのは、人手不足だったからだ。

世紀に一人の英傑とされた「勇者」が冒険者出身であったため、当時は定職に就かず国中を放浪し、害獣となる魔を駆除して糊口をしのいでいたような者たちへの蔑称であつた「冒険者」は、たちどころに民衆の憧れの的となつた。

かくてそれまでは汚い浮浪者の溜まり場、といつた風情だつた寄場に人が溢れた。組合への登録を求める者、依頼の貼り出された掲示板を食い入るようにつめる者、ダゲレオタイプ写 真を提示して賞金の支払いを求める者、宿や仕事を求める者や、バスホール旅行免状に裏書を求める者などが一気に書記詰め所へ押し寄せ、窓口はパンクした。

そのさなかにエマニユエルは雇われ、忙しくも楽しい日々を送っていたのだ。

彼が思い返していたのは、その日々だった。詰め所は常に喧騒にあふれていた。事務方と声高に話し合う者、掲示板を見上げて落胆の声を上げる者、そして広間の卓で、昼間から氣勢を上げる飲兵衛たちの歓声。

翻つて今、彼が呆と眺めている詰め所の様子はどうかであろうか。

過去の喧騒はどこへやら、ほとんど無人である。開いている窓口は、エマニユエルの席ただ一つ。彼の背後に一打ある事務卓も、二、三の書記のいる席を除けば、物置代わりになつている。広間は無人で、奥の厨には人氣も火の氣もない。

そして何より暗かった。広間は南向きである。この時刻なら明るい陽光が射し込み、書き物にも灯りがいらぬほどのはずだった。しかし今、詰め所を照らしているのは、所々に置かれた蠟燭のわずかな光である。窓という窓は鎧戸が下ろされ、羽目板を打ち付けて封印されている。かつては開け放しであつた玄関の大扉も今は閉ざされ、二重に門がかけられている。

なぜこんな措置を取っているのかと言えば

エマニユエルの耳に、聞きたくない音が入ってきた。集合した人間が織り成す騒々しい叫びだ。混沌として何を言っているのか一向に聞き取れないが、いつものことなので彼らの言いたいことが、エマニユエルにはわかつていた。

彼らの声は次第に近づき、やがて詰め所の前で留まった。統制された大声が張り上げられる。

曰く、

「既得権益に固執するコンパニオナージユは解散せよ」

「王に続いて評議会に媚びを売る、権力志向の豚はいらない」

「革命の都に、互助を騙る権力団体など最早不要」等々。

しかしエマニユエルも他の書記たちも、代わり映えしない戯言と聞き流していた。問題なのはこの後だ。

広間に衝撃音が響いた。誰かが玄関扉を叩いたのだ。叩き金を使って案内を求めたわけではなく、角材か何かで殴っているらしい。さらに彼らは羽目板を引きはがすと——やや明るくなったのでそれがわかった——鎧戸を殴り始めた。石材や鉄棒などを使っている者もいると見え、広間はガンドンゴンと様々な音程の、リズムカルな騒音であふれた。

詰め所に緊張が走る。外が見えないのでわからないが、もし彼らが大きな丸太や破城槌ベリヒを持ってきていたら、鉄製と言えども玄関の大扉が耐えられるとは思えない。

エマニユエルをはじめ書記たちは、扉が破られることに怯えていた。責任者である番頭や書記役が不在である以上、群衆がなだれ込んで来れば、自分たちが血祭りにあげら

群衆の声は怯んだように小さくなった、が、すぐに先ほど以上の勢いをもって噴出し始めた。

「評議会は民衆の自由を否定するののか！」

「何のための革命だ！」

「我々よりも王党派のところへ行くべきだろう！」

憲兵隊への叫びはしかし、直ちに中断される。憲兵隊が制式連発魔導導騎兵銃の掃射を加えたのだ。東の帝国が生んだ、発条駆動の魔導銃が怒りのスタツカート^{ぜんまい}を刻み、群衆の声はたちどころに悲鳴の占める割合が大きくなった。一息置いてさらにもう一掃射。群衆は完全に統率を失い、散り散りに逃げまどつているようだ。追躡する憲兵達の怒鳴り声と魔導銃の散発的な銃声が、寄場の敷地中に広がり始めた。

どれほどの時間が経ったか、憲兵の怒号と銃声、群衆の悲鳴が収まると、玄関扉が叩かれた。力強い、ともすれば威圧的な叩き方だったが、鉄棒で滅多打ちにされるよりはるかに礼儀正しい。

エマニユエルは、できれば自分で出たくなかった。玄関の前にあるであろうものを目にしたくなかったし、嗅ぎたくなくなかった。それでも、当然窓^{コントワール}口は事務卓の島より玄関寄りにあり、他の書記たちが席を立つ様子もない。エマニユエルは

仕方なく立ち上がると、玄関扉に歩み寄り、門を抜いて注意深く扉を開けた。

玄関に立っていたのは一人の憲兵軍曹。厳つい顔に立派な髭を蓄えている。エマニユエルは軍曹を注視することで、彼の背後にあるものに焦点を合わせないようにしていた。それでも臭いは容赦なく鼻腔へ侵入する。血と糞尿と、火薬の入り混じった臭い。そして声だ。音もまた、遮るもの無く彼の鼓膜を揺らしてくる。不幸にも、弾丸を喰らってなお、死ぬことになかった者たちの苦悶の唸り。それが何重にもなつて、重厚な朗唱^{レントテフ}を想起させる。

軍曹が喋りだした。

「責任者はいるかね」

「いえ」

「では貴君をコンパニオナージユの代表者と見做して命令する。首都の公衆衛生に関する条例に基づき、敷地内、ならびに周辺街路の汚物を直ちに除去すること。知つての通り、コミュニケーションはまともに機能していませんのでな。清掃係には期待しないように」

「わかりました」

「ガアアアアアアアア！」

突如、玄関脇で襪襦雑巾のようになっていた暴徒の一人が起き上がり、軍曹に襲い掛かった。当の軍曹は眉一つ動かさずに振り向きざま、暴徒の顔に見事な右ストレートを

決めた。ギャツと叫んでひっくり返った暴徒に、軍曹はすばやく魔導騎兵銃の銃床を振り下ろし、頭蓋骨を砕いてしまった。

一部始終を目にしてしまったエマニュエルは、今にも反吐すか失神しそうだったが、軍曹は彼の方を見て一言、

「死んだふりには充分注意するように」

とだけ言い、頭部の歪んだ遺骸を捨て置いて、憲兵伍長のいる方へ歩き去った。

黒い兵隊外套マントの背中を見送り、扉を閉めるとエマニュエルは大きく溜め息をついた。今言われたことを同僚たちに伝えなければならぬ。そして寄場中に散らばる遺骸を下水道に放り込まなければならなかった。夜には腐り始めて、さらにひどい臭いを放つだろう。今日中に終わらせなければならぬ。

すでに日は傾き始めていたが、彼の一日の一番ひどい部分は、これから始まるうとしいた。